

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 31 日現在

機関番号：12501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24593189

研究課題名(和文) 病院外来における患者・市民・実践者・研究者の新たなニーズや期待、役割発揮の可能性

研究課題名(英文) The new needs, expectation and capability for nursing role in outpatient clinic among patients, citizens, medical practitioners and researchers.

研究代表者

奥 朋子 (OKU, Tomoko)

千葉大学・医学部附属病院・看護師長

研究者番号：20375885

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円

研究成果の概要(和文)：高齢化の進展に伴う2025年に向け、国は病院機能の役割分担推進しており、その中で急性期医療を担う病院は入院期間の短縮化、他機関との連携を求められるようになった。大学病院の総合案内において看護師は、限られた情報から瞬時に難易度の高い専門的判断を下している実態が明らかとなり、大学病院がその社会的役割を果たす上で、総合案内における看護職配置の意義は高いことが示唆された。また医療依存度が高く複雑な問題を抱える外来患者の増加に伴い、外来診療科における看護師が専門性の高い看護の必要性を見極め、適切に看護専門外来との連携を図るための基準及び手順の必要なことも明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：Japanese government recommends to share the function of hospitals and acute hospitals are required to shorten hospitalization period and cooperate with other medical facilities. At a general reception of a university hospital nurses judge a special decision from limited information about patients in a few minutes and it is meaningful that placement of nurses at a general reception in a university hospital to play an important social part. With the increase the number of patients depends on intense medical care, the nurses in general who work in the outpatient clinic need that how to make sure of patients who needs advanced nursing care at special nursing clinic and cooperate with advanced practice nurses.

研究分野：臨床看護学

キーワード：外来看護 一般外来看護 看護専門外来 連携

1. 研究開始当初の背景

生活習慣病の増加、診断・治療法の進歩、在院日数の短縮化を背景として、近年、日本の病院外来でのケアサービスの範囲、対象患者数は拡大しているが、診療報酬上の外来看護師の配置基準は依然として変わらず、外来看護の質は各病院の裁量に任されている現状である。

2002年までの外来看護に関する10年間の研究では、外来看護実践による費用対効果等が課題にあげられ、外来看護の質の評価やケアの根拠を示すことが課題であった(文献)。その後10年が経過しても同様の状況は続いている。看護外来の質向上のための環境システム整備について提案し整備の実態を調査した研究(文献)では、導入が遅れている項目は、「看護実践能力到達度別人員配置」、「人事考課」、「専門・認定看護師の活用」、「看護師による専門外来」、「外来機能分離」と示されている。また、がん専門施設における患者の主体的療法を支援するための看護実践を日米比較した論文(文献)では、日本の外来システムと最も大きく異なる点は、看護職者の機能的配置であった。

一方、看護職による看護専門外来に関する研究や報告は近年増加している。例えば助産師外来では看護職の独自の機能が示されている(文献)。さらに、看護の新たな役割の拡大をねらい、臨床と教育の連携により看護専門外来システムの構築と評価等を開始している施設もある(文献)。また、ケア対象者や協働する医療者からのニーズ調査から、より対象者や関連者のニーズに即した新たなケア方法・体制が提案されている(文献)。

以上の文献からは、新たな外来看護の創出には、対象者の新たなニーズを明らかにしそれに対応した新しいケア方法の創出とともに、エビデンスの生成・蓄積、人材育成、質向上につながる環境・体制整備(看護職者の配を含む)を同時に行い、質担保のための仕組みが内包されているシステムの必要性が示唆された。今回、さらに新たな外来看護のあり方を検討したいと考え、本研究に取り組みこととした。

2. 研究の目的

現代の病院外来における患者・市民・実践者・研究者の新たなニーズや期待、役割発揮の可能性として、下記の内容を明らかにする。

- (1) 外来患者・家族が認識する外来看護のニーズや期待、役割発揮の可能性
- (2) 実践者・研究者のニーズや期待、役割発揮の可能性
- (3) 外来における医療職の対応潜在力
- (4) 外来の物理的環境影響を測定する方法

3. 研究の方法

現代の病院外来における患者・市民・実践者・研究者の新たなニーズや期待、役割発揮

の可能性を明らかにするために、外来通院中の患者・家族、患者会、市民ボランティア、大学病院の看護職、協働する他職種、外来の場で研究を望む看護研究者、大学病院外来との連携を望む地域の看護職、外来看護の有識者、外来の環境測定の方法論の有識者等、幅広い対象者への調査、ヒアリング、有識者会議を実施する。その結果を整理し、より患者・市民に必要とされ、確かな研究知見の創出・適用・活用が促進される新たな外来看護の検討に向けた基礎資料を作成する。

4. 研究成果

(1) 外来患者・家族が認識する外来看護のニーズや期待、役割発揮の可能性

入院期間の短縮に伴い、問題を残したまま退院する患者も多く、これにともない外来看護師の役割として、在宅療養を行っている患者の経過を受診時に的確に把握することが必要である。患者が自宅に帰ってから実際に生活をする中で初めて生じてくる問題に対し、外来看護師は今後の援助の方向性を見極めたうえで患者の生活指導を行うことが重要となってきている。このような現状から、外来での受け持ち制看護や患者カンファレンス等を行い、外来看護の充実を目指した外来での受け持ち制看護や定例カンファレンス等の取り組みを行った。その取り組みの中で、外来看護師の看護に対する意識に変化が起こり、個々の看護師が外来看護のやりがいの実感などの成果があった。

(2) 実践者・研究者のニーズや期待、役割発揮の可能性

現在行われている看護専門外来の実践に基づく、専門外来へのニーズの調査項目の検討として、専門外来において看護実践を行っている看護師を対象に、その実践内容についてインタビューを行い、看護専門外来において看護師が実施している実践内容にもとづいて、看護専門外来における課題を明らかにした。看護専門外来における課題は、「患者スクリーニングにおける課題」、「対象患者における課題」、「チームアプローチにおける課題」、「人材育成における課題」、「看護専門外来の看護師の活動における課題」、「活動の可視化における課題」、「体制整備における課題」の7つが明らかになった。

(3) 外来における医療職の対応潜在力

大学病院の総合案内における看護職固有の機能を明らかにするために、A大学病院総合案内で2013年4月～9月に看護師が対応内容を記録した業務連絡ノートから患者背景、相談内容、対応を転記し、患者のニーズ、看護師の対応、必要とし判断を記述し、その特徴から看護職固有の機能を考察した。看護師が対応した全94案件中看護過程の展開を必要とした79件の分析より、患者の身体状態とそのアセスメントに基づく判断、患者のニーズと医療機関側の特徴をすり合わせて適切な医療を提供するための判断、患者の心に

寄り添い納得をつくり出すための判断という特徴が見出された。

大学病院がその社会的役割を果たす上で、総合案内における看護師に求められる対応は達人看護師レベルの実践能力を要する。ペナー（文献）は、「達人は、状況全体の深い理解に基づいて行動する」と述べている。また「達人の実践は、看護師仲間や患者の目からは明らかであっても、普段の業務評価基準では把握できないことがある」ともいっている。総合案内において看護師は、限られた情報から、瞬時に難易度の高い専門的判断を下しているという実態が明らかとなった。総合案内では、病院の「顔」としての、質の高い接遇が求められると同時に、必要時に高度な実践能力を持つ達人レベルの看護師が対応できる体制が求められる。それには、総合案内において患者に対応している事務担当者や警備担当者等と連携し、看護師による対応を要する案件を適切に看護師につなぐ体制づくりと同時に、外来看護の達人の育成も重要であると考えられる。総合案内の看護師は、限られた情報から瞬時に難易度の高い専門的判断をしている実態が明らかとなり、大学病院の総合案内における看護職配置の意義は高いことが示唆された。

(4) 外来の物理的環境影響を測定する方法

研究期間中、外来棟が新築されることとなり、外来から入院、退院後の在宅療養といった患者の流れに沿った療養支援システム：PFM (Patient Flow Management) システムの実際を知るため、東京慈恵会医科大学葛飾医療センターPFM センターの視察を行い、外来の物理的環境影響について検討を行った。また、物理的環境要因として、一般看護外来での看護実践だけでなく、複雑で解決困難な問題を抱える外来患者の看護支援をさらに充実させるために、新外来棟における「看護専門外来」の開設及びブース確保の必要性が見いだされた。また、一般看護外来と看護専門外来との連携の必要性が見いだされた。具体的な測定方法を見出すことはできなかったが、外来看護の具体的構想について研究者間で検討を行い、下記の体制の提案を病院の新外来棟関連会議に提出し、新外来棟内の看護専門外来ブース確保に至った。



< 文献 >

佐藤 正美、金田一 理香、末永 由理、剣持 梓：外来看護に関する研究の動向と課題．川崎市立看護短期大学紀要 8(1)85-96、2003．

大津 佐知江、佐伯 圭一郎、草間 朋子：外来看護の質向上のための環境システム整備に関する調査．看護科学研究 8(2)21-28、2009．

増島 麻里子、佐藤 まゆみ、小西 美ゆき、菅原 聡美、佐藤 禮子：米国におけるがん患者の主体的療養を支援するための外来看護実践．千葉大学看護学部紀要 25、61-66、2003．

恵美須 文枝、柴田 真理子、森田 輝、潮田 千寿子：妊産婦ケアシステムに関する検討 文献からみた助産婦外来の実態について．東京保健科学学会誌 5(4)194-199、2003．

岩永 喜久子：臨床-教育連携による看護職の養成と役割拡大．The Kitakanto Medical Journal 59(3)311-312、2009．

川崎 優子、内布 敦子、荒尾 晴恵、大塚 奈央子、滋野 みゆき：外来化学療法を受けているがん患者の潜在的ニーズ．兵庫県立大学看護学部・地域ケア開発研究所紀要 18、35-47、2011．

川崎 優子、内布 敦子、荒尾 晴恵、大塚 奈央子、滋野 みゆき：医師が認知する外来化学療法における看護ニーズ．兵庫県立大学看護学部・地域ケア開発研究所紀要 17、25-37、2010．

寺山 範子、蛭子 真澄、蓬萊 節子、池川 清子、早川 悦子、鱒見 映子、清原 あゆみ：HIV 陽性者の体験を通じた外来採血システムの見直しに関する報告．神戸市看護大学紀要 10、43-48、2006．

吉田 澄恵、青木 きよ子、照沼 則子、奥出 有香子、桑子 嘉美、浅野 美知恵：外来小手術患者への看護サービス管理の実態調査用紙の作成経過 大学病院における外来看護ケアシステムの開発に向けて．医療看護研究 2(1)124-129、2006．

パトリシア・ペナー：ペナー看護論新訳版 初心者から達人へ．医学書院、2005．

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 2 件)

阿部礼子、高須清子、高梨希子、荘司京子、

奥朋子：継続した外来看護の取り組み～受け持ち制看護とカンファレンスの充実～、第19回千葉看護学会学術集会交流集会、発表年月日：2013.9.14 千葉大学看護学部（千葉県千葉市）

奥朋子、和住淑子、山本利江、阿部礼子、高梨希子、鮎澤ひとみ、金澤薫：大学病院の総合案内における看護職固有の機能に関する研究、第21回千葉看護学会学術集会口演発表、発表年月日：2015.9.12 千葉大学看護学部（千葉県千葉市）

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕(計0件)

6. 研究組織

(1)研究代表者

奥 朋子 (OKU, Tomoko)

千葉大学・医学部附属病院・看護師長

研究者番号：20375885

(2)研究分担者

山本 利江 (YAMAMOTO, Toshie)

千葉大学・看護学研究科・教授

研究者番号：70160926

手島 恵 (TESHIMA, Megumi)

千葉大学・看護学研究科・教授

研究者番号：50197779

和住 淑子 (WAZUMI, Yoshiko)

千葉大学・看護学研究科・教授

研究者番号：80282458

黒田 久美子 (KURODA, Kumiko)

千葉大学・看護学研究科・准教授

研究者番号：20241979

増島 麻里子 (MASUJIMA, Mariko)

千葉大学・看護学研究科・准教授

研究者番号：40323414

谷本 真理子 (TANIMOTO, Mariko)

東京医療保健大学・医療保健学部・教授

研究者番号：70279834

(平成24年度)

小林 美亜 (KOBAYASHI, Mia)

千葉大学・医学部附属病院・特任准教授

研究者番号：00327660

(平成24年度～25年度)

(3)連携研究者

谷本 真理子 (TANIMOTO, Mariko)

東京医療保健大学・医療保健学部・教授

研究者番号：70279834

(平成25年度～平成27年度)

(4)研究協力者

正木 治恵 (MASAKI, Harue)

吉川 淳子 (YOSHIKAWA, Junko)

金澤 薫 (KANAZAWA, Kaoru)

高梨 希子 (TAKANASHI, Mareko)

平井 洋子 (HIRAI, Yoko)

(平成24年度)

荘司 京子 (SHOJI, Kyoko)

(平成24年度～25年度)

塚原 宣子 (TSUKAHARA, Nobuko)

(平成24年度～25年度)

阿部 礼子 (ABE, Reiko)

(平成25年度～27年度)

鮎澤ひとみ (AYUZAWA, Hitomi)

(平成26年度～27年度)

小林 美亜 (KOBAYASHI, Mia)

(平成26年度～27年度)